

紀 要

第 1 号

目 次

『紀要』の創刊にあたって

1. 琵琶湖湖底遺跡の調査の現状……………(濱 修)
 2. 近江の地域色の再検討
—弥生時代後期～古墳時代初頭における高坏形土器・器台形土器の実態—
……………(小竹森直子)
 3. 古式土師器研究ノート(1)……………(森 格也)
 4. 竪穴住居に付随するカマドの検討—滋賀県下の検出例から—……………(宮崎幹也)
 5. 衣川廃寺の再検討……………(細川修平)
 6. 穴太廃寺の建立と再建の年代をめぐって
—穴太廃寺のもつ問題点からのアプローチ—……………(仲川 靖)
 7. 中世土師器皿と生産地……………(横田洋三)
 8. 近江における瓦質土器について……………(奈良俊哉)
 9. 浮世絵にあらわれた煎茶茶碗……………(稲垣正宏)
 10. 魚獲りって難しい—抄網の機能と形態—……………(大沼芳幸)
-
-

1988. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

2. 近江の地域色の再検討

——弥生時代後期～古墳時代初頭における 高坏形土器・器台形土器の実態——

小竹森 直子

1. はじめに

近江の弥生土器を取り扱う際の大きな特徴の一つとして、弥生時代中期以降後期を通じて、近江型受口状口縁甕形土器がある。「近江型」と冒頭に着くように、これは近江の地域色を表し、その形態・文様等は他のものと明確に区別し得るものである。また、その系譜は弥生時代中期に遡り、古墳時代初頭に至る。したがって、近江における当該期の土器編年は、この受口状口縁甕形土器の時間的位置付けを軸として進められている。

さて、近江の弥生時代後期の地域色を論じる場合、この受口状口縁甕形土器および同様の特徴を有する鉢形土器が、その強烈な特徴により最も顕著なメルクマールの一つであることは確かであるが、あくまでも諸要素の一つであることも確かである。つまり土器群としての要素の一つであって、それらの統合的なものとして『近江的』とは何かを明らかにしなければならない。しかし、現在の筆者にはその力量がないため、その要素の中から高坏形土器と器台形土器を主としてその分析対象として取り上げ、今後の基礎としたい。

2. 形態分類と変遷

高坏形土器と器台形土器を取り上げた理由を最初に述べておきたい。器台形土器に関しては、かつて佐原真氏が行なった指摘に依るところが大きい¹⁾。『彦根市史』における「後期には器台形土器とよばれ、壺形土器の台として用いられたと考えられる土器の発達が滋賀県の弥生土器の一特色をなしている。」「畿内的な様式に統一されていくこの段階の弥生土器にあつて、ここには畿内にも東海にもただちに比較しうるものがみられないということ、即ちこの地方独特の器形であるということは特筆に値する。」との指摘は、その後検証されることもないままに今日に至っているが、大きくは変わっていないという見通しに立っているからである。高坏形土器は、器台形土器と同様に物を盛る：受け台としての機能を持ち、小型化の傾向にあるため、同時に扱うこととした。また、これらからはセットとなる器種に問題を派生・発展し得るからでもある。

分析作業の進め方としては、まず高坏形土器と器台形土器の形態分類を行い、それぞれの時間的動向を探り、近江における実態を把握したい。その後、他地域との比較および関連器種との問題に触れ、近江的な要素を抽出し得るか否かの検討を加えて行きたい。

(1) 形態分類

形態分類は、土器の持つ製作技法・文様・形態等の諸要素をすべて包括して行なわなければならないが、ここでは主として形態上の変化による分類を行なう。

—高坏形土器— (第1図)

A類：受部に外彎する口縁部が付加する一群。脚部は中空でゆるやかに裾部がひろがるものと、やや屈曲するものがある。

A 1 口縁部が直立あるいはやや外反するもの。柱状の脚部を持つものもある。

A 2 口縁部が外彎するもの。脚部はゆるやかにひろがるものとやや屈曲するものがある。

A 3 受部が短くなり、口縁部が長く大きく外彎するもの。

B類：受部が短く、口縁部が直線に大きくのびる深いもの。

B 1 深く大きく直線的にのびる口縁部に、八の字状の脚部がつくもの。

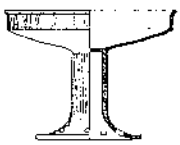
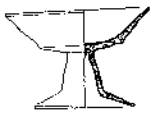

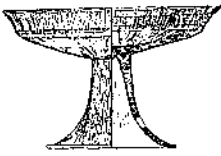
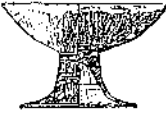
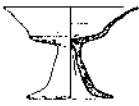
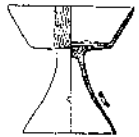
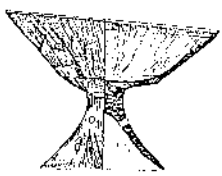
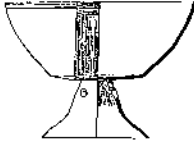
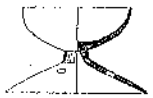



B 2 円錐状の柱状部から、短く屈曲して裾部が広がる脚部を持つもの。細いへらミガキを多用する。

C類：椀形の坏部を持つもの。

C 1 浅い椀形の坏部を持ち、脚部はゆるやかにひろがる。

D類：短い受部に、口縁部は受部との境に明瞭な稜を持って内彎気味に大きく立ち上がるもの。脚部は、内彎気味にひろがる。

D 1 水平気味にのびる受部に、直立気味にのびる口縁部がつくもの。

高坏形土器類	A1		B類	B2		高坏形土器E類	D4	
	A2			高坏形土器C類	C1			E1
	A3		高坏形土器D類	D1			高坏形土器F類	F1
高坏形土器	B1			D2		高坏形土器G類	G1	
				D3			G2	
						G3		

第1図 高坏形土器形態分類表

D 2 坏部は深く、口縁部は内彎して立ち上がるもの。

D 3 形態はD 2と同様であるが、口縁部内面を肥厚させ、施文する。

E類：部は浅い皿状を呈し、下部に弱い稜をもつもの。

E 1 脚部はゆるやかにひろがる。

F類：プランデーグラス状の坏部を持つもの。

G類：中・小型の高坏形土器

G 1 半球形状の坏部に、偏平な脚部がつくもの。

G 2 受部端部が短く立ち上がるもの。脚部は八の字状にひろく。

G 3 D 2に類似した形態のもの。

G 4 坏部はD 2と同様であるが、偏平な脚部の裾部に文様を施すもの。中型品。

—器台形土器— (第2図)

A類：筒状を呈し、上下がほぼ対象なもの。


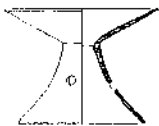







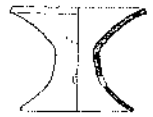
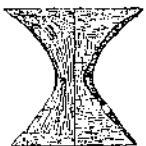

A 1 口縁端部・脚部がゆるやかに外彎するもの。

A 2 直線的に筒状にのびる柱状部に、直線的にひろがる受部を持つもの。

B類：ゆるやかに上下方にひろがる、鼓状のもの。

B 1 中位でゆるやかに屈曲し、上下がほぼ対象なもの。

B 2 上位でゆるやかに屈曲するもの。

器台形土器A類	A1		C類	C2		器台形土器F類	F1	
	A2			C3			F2	
器台形土器B類	B1		器台形土器D類	D1			F3	
	B2			E類	E1			
器台形土器	C1			E2	+			

第2図 器台形土器形態分類表

C類：受部と脚部の境が明瞭なもの。口縁端部を垂下させるものもある。

C 1 中位に屈曲を持ち、X字状を呈するもの。

C 2 上位に屈曲を持つ。脚部は外彎気味のものと直線的にのびるものがある。

C 3 上位と下位に屈曲を持つもの。

D類：上位に屈曲を持ち、垂下した口縁端部面に装飾を施す中型品。

D 1 受部がやや内彎するものもある。波状文、棒状・円形浮文を施す。

E類：2段に大きく屈曲する受部・脚部を持つもの。

E 1 口縁・脚部端面に擬凹線を施すもの。

E 2 いわゆる鼓状器台。

F類：小型品の器台形土器。

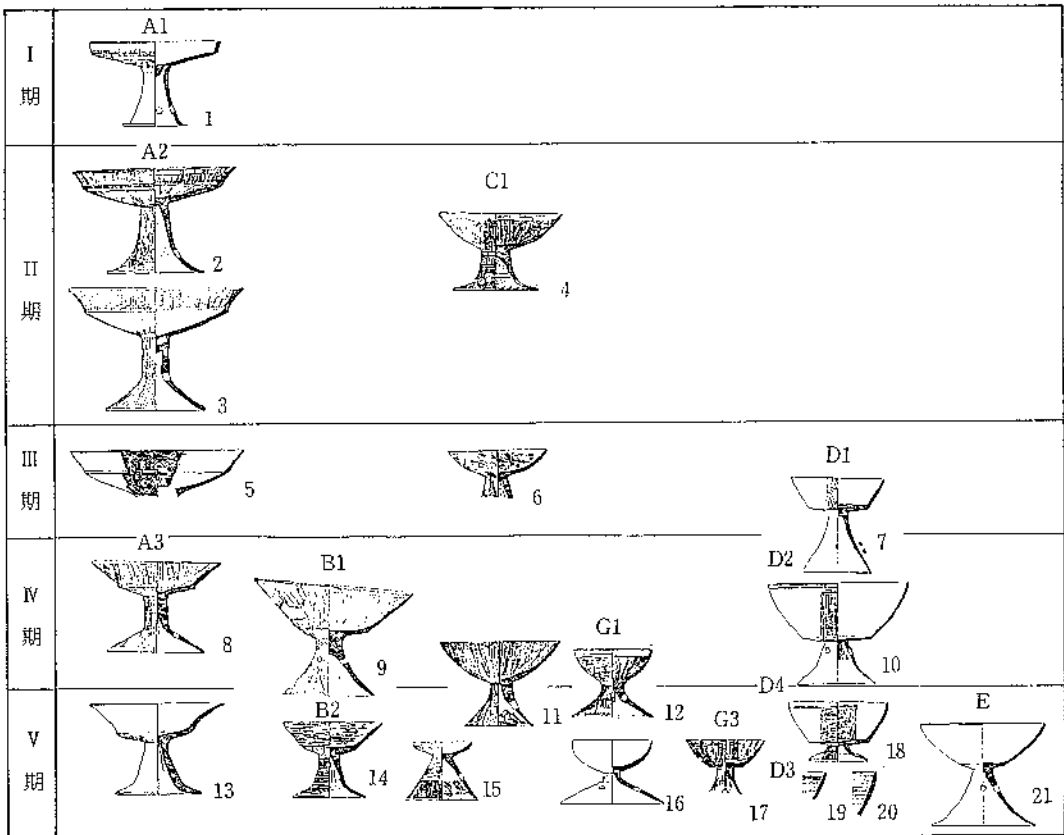
F 1 中位に明瞭な屈曲を持ち、X字状を呈するもの。

F 2 上位に明瞭な屈曲を持つもの。

F 3 上位に明瞭な屈曲を持ち、ゆるやかに内彎する皿状の受部を持つもの。

(2) 時間的変遷

次に、(1)で行った各形態の時間的変遷を追ってみたい。近江における弥生時代後期～古墳時代



第3図 高坏形土器変遷図

1. 服部, 2・10・14・19・22. 北大津, 3. 大辰己, 4. 伊勢, 5. 久野部十ヶ坪, 6・8・21. 嶋田, 7. 大伴, 9. 綿織, 11. 播磨田東, 12. 南市東, 13. 小高, 15・16. 片岡, 17. 稲部, 18. 高木, 20. 品井戸, 23. 正伝寺南, 24・25. 吉武城

初頭の土器編年はいまだ確立したものが無いため、ここでは当該期を以下の5時期に大別することとする⁽²⁾。

I期：西ノ辻I式併行期

II期：西ノ辻E・D式併行期

III期：上六万寺・北鳥池下層式併行期

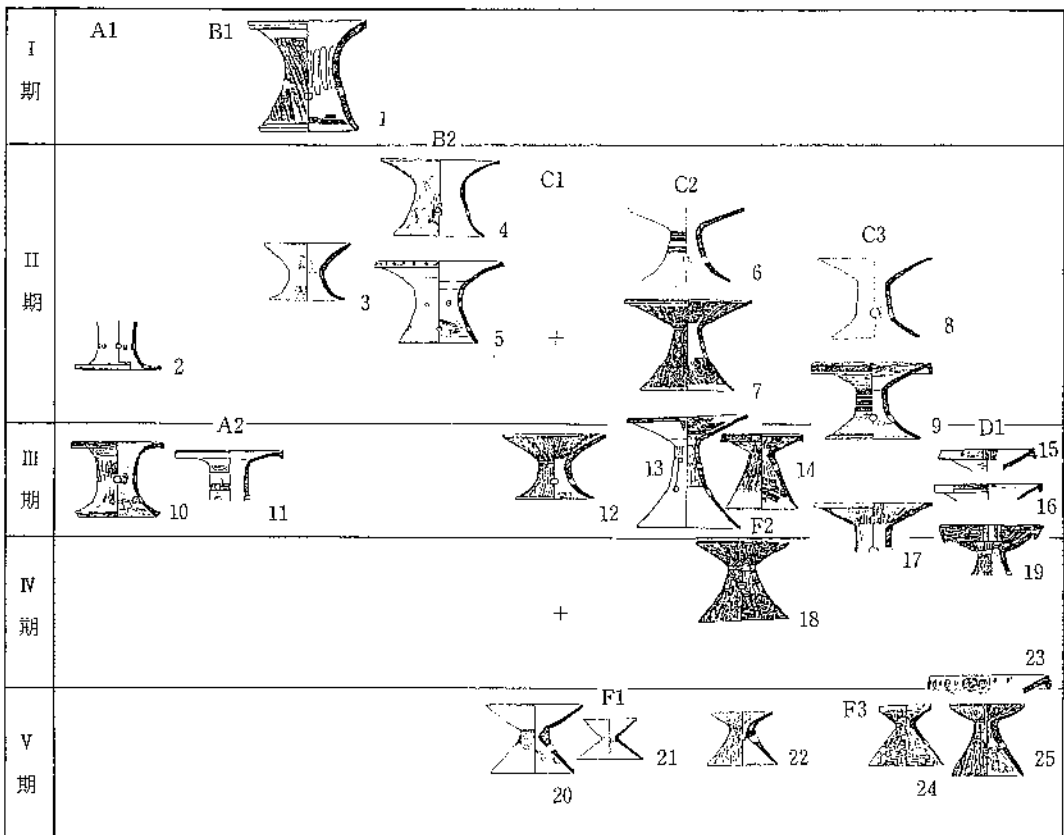
IV期：庄内式併行期

V期：布留式併行期

II期については2～3形式を包括し、III期についても複数形式を含みつつも、近江において北鳥池下層式に直接的に対比し得る資料の存在が不確かなため1時期としており、各時期が更に細分可能であることは言うまでもない。

—高环形土器— (第3図)

近江では確実にI期に属する遺跡が現在のところ少なく不明瞭ではあるが、弥生時代中期第IV様式の直口の高环形土器に系譜を引くと考えられるA1類が見られる。受部と外反気味の口縁部との境はやや曖昧で、後続するII期のA2類と比べるとシャープさに欠ける。脚部は円錐形様にひろがるものと、柱状部分をもつものがあるが、いずれも円盤充填法により成形されている。



第4図 器台形土器変遷図

1. 弘川, 2・4. 伊勢, 3・6. 南市東, 5. 小島, 7. 唐川, 8. 北大津, 9・16. 下々塚, 10. 大伴, 11・14・15. 吉武城, 12. 五之里, 13. 針江川北, 17. 金ヶ森西, 18~20. 大辰己, 21. 品井戸 (S=1/2)

II期は、A1類に継続するA2類を主体とする。口縁部が外彎し、受部との境に明瞭な稜を形成するようになる。脚部は、直線的にひろがるもの、ゆるやかに外彎してひろがるもの、屈曲して裾部がひろがるもの等多様化している。また従属的であるが、口縁部外面に櫛描波状文・ヘラミガキによる波状文様等の文様を、脚部に櫛描直線文を数段施すものがある。また、浅い椀形様の坏部を持つC類も存在する。C類は、弥生時代中期第IV様式の深い椀形形様の坏部を持つものに系譜関係があると考えられ、I期にも存在する可能性は高い。脚部はA2類と比較すると短脚で偏平なものがつき、形態間差が考慮されているようである。当期より高坏形土器の出土量は増加し、土器群の中における当器種の占める割合は高くなる傾向にある。

III期においてもII期と同様にA2類を主体としているが、細部形態は更に多様化している。ほぼII期のもとの変化のないもの、II期のもとの比較すると、口縁部が長くなってより外方にのび、かつ受部が若干深くなるために両部位の境の明瞭さが低下するもの、口縁部が長くなり、受部が短くなって坏部の深さが増すものに大別され、前二者がその大半を占めている。脚部は依然として中空のものが主体をなし、円盤充填法のものもかなり残存している。

IV期では、III期までの基本的には畿内と類似した様相とは一変し、近江内での地域間差が顕著になるため、まず、当期に見られる各形態の特徴を記述した後に、近江内でのあり方の差異について記述したい。

A2類と、この発展形態であるA3類、そしてC類が前段階からの系譜の中で扱えられるものである。まったく別系統のものとしてD1～3類が、一部はIII期に存在していたと考えられるが、当期においてA・C類に取って代わる⁹⁾。D1～3類は、当該期の伊勢地方～西部遠州地方に普遍的に存在する欠山式特有の高坏形土器に類似する形態をもつものである。D類の中では浅い坏部に裾部が内彎する長脚のD1類は稀少であり、D2・3類が主体となっている。口縁部端部は内傾した平坦面を形成し、若干肥厚させるものもある。脚部はA・C類と比較すると偏平・短脚であり、内彎するものと八の字状に直線的にひろがるものがある。D3類は形態的にはD2類と同じであるが、口縁部内面を肥厚させて櫛状工具による直線文・刺突文を施し文様帯としている。小型化の傾向はA3類にも見られるが、定型化した小型高坏形土器G2類の前形態としてのG1類が少量ながら存在する。

以上の各形態は、近江内で一様の在り方を呈していない。遺跡間での多少の差異はあるが、湖西・湖北ではD2・3類が主体あるいはこれらのみからなり、A3類は従属的に存在する。これに対して湖南・湖西南部では、A2・3類を主体とし、D2・3類およびG1類が少量含まれる状況にある。

V類では、布留式に典型的なB2類および定型化した小型高坏形土器であるG2類が一様に見られ、IV期に見られた南北差は減少するが、元屋敷式類似のE類、中・小型品であるD4・G3類はやはり近江北半の地域で含まれる率が高い。

—器台形土器— (第4図)

I期のものは数が少ないため不明瞭であるが、筒状のA類と共に、柱状ではなく、わずかながら屈曲部を持ち、B類の先駆的形態になる可能性を持つものが含まれるようである。

器台形土器の量が少ない傾向はⅡ期前半においても続いている。当期では、上下がほぼ対象形を呈する筒状のA類と、屈曲部を持つことにより受部と脚部がより明瞭化したB類の系譜のものが存在している。A類が受部・脚部端をほぼ水平になる程度外彎させて面を形成しているのに対して、B類は屈曲部から受部が直線的にのび、端部は単純に収めており、脚部も同様である。当期後半には、B類の系譜からの分化形態と考えられるC類が盛行し、B・C類が器台形土器の主体となる。C類は、屈曲部がより強く絞り込まれ受部と脚部の境が明瞭なものである。これは、B類の分化形態として捉えることができると同時に、中でもC2類は、A類の高坏形土器から口縁部を取り除いた形態に極めて類似していると言える。換言すれば、器台形土器C2類の受部に外彎する口縁部を付加し、脚部との中空部に円盤充填を行って閉塞すれば高坏形土器A類になるわけで、両者が同一の技術基盤にあることを示していると言えよう。

Ⅲ期においては、C類を主体として器台形土器が盛行し、B類が従属的に存在する。A類は少量存在するが、当期中には消滅するようである。B類にあまり変化は認められないが、C類は受部端部を単純に収めるもの、わずかに拡張させ面を形成するもの、垂下させて装飾を加えるもの、C2類では長脚のもの等があり、細分化が進んでいる。加飾の傾向は、C類の系譜を引くと考えられるD類でより顕著に認められる。D類はC2類に類似した形態を取るが受部が短く、内彎気味のものもある中型品である。受部端部は垂下させ櫛描波状文・直線文と棒状・円形浮文を組み合わせて施し文様帯を形成している。C・D類に施される文様は、櫛描波状文・直線文、棒状・円形浮文、竹管刺突文がその主要素であるが、その組合せおよび加飾部位の組合せと細分化した形態の中で明確に異なる場合があり、制作時に各要素に対する使い分けの意識が存在していたと考えられる。

Ⅲ期～Ⅳ期にかけての畿内では、器台形土器が土器群の中で従属的に少量存在する傾向にあるのに対し⁽⁴⁾、近江においてはⅣ期にあっても、C・D類を主体として主要器種として存在している。また、C1・2類の小型品であるF1・2類が認められる。F1・2類には装飾は加えられず、受部端部は単純に収めている。また、脚部径が受部径を凌駕する傾向を持つものも認められる。

V期には、F1・2類に加え、定型化した小型器台形土器であるF3類が存在し、大型品は激減し、主要器種としてはF類が残ることとなる。現在のところ畿内においては当期に定型化する小型器台形土器の系譜に不明な点が多く、弥生時代後期の器台形土器との間に断絶がある様であるが⁽⁵⁾、近江においては、C類の系譜における小型化の傾向の中でスムーズに捉えることが可能である。

3. 周辺地域との比較

近江は、各々特徴的な土器文化を有する畿内・東海・北陸の3地域に接し、大なり小なりの影響を受けている。高坏形土器・器台形土器における北陸の影響は極めて少ないようであるため、ここでは畿内と東海の2地域との比較を試みてみたい。

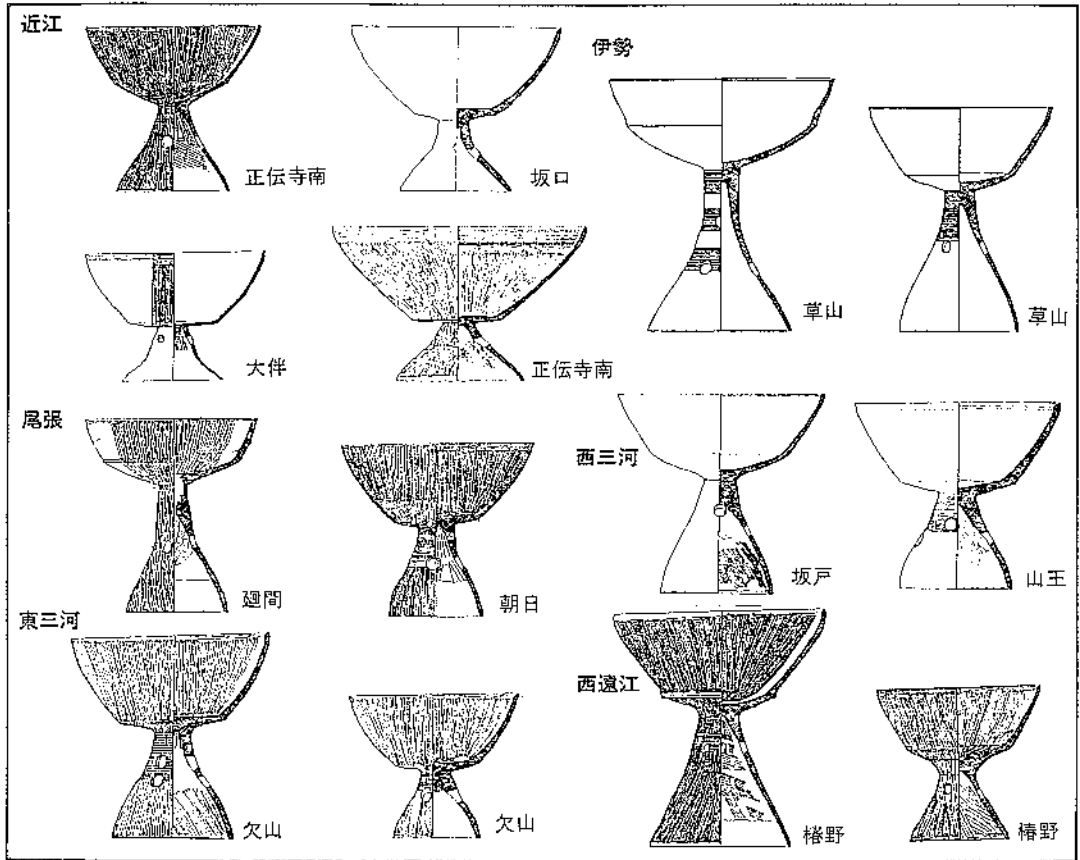
高坏形土器の在り方について畿内を軸として対比すると、基本的に畿内的であるⅠ期～Ⅲ期が、

IV期において近江北半を中心として系譜の全く異なる東海的なD類を主体となし、定型化した小型高坏形土器が波及・定着するV期に再び齊一的になる推移自体、特徴的であると言えよう。III期までのA2類からIV期のD1・2類への転換は、むしろ東海における山中期から欠山期への推移の在り方に極めて類似していると言える。話を畿内との対比に戻すと、畿内ではII期後半以降脚部の中実化が進行し、それに伴い坏部と脚部との組合せ方は円盤充填法から差込み法への転換が見られるに対し、近江では中空・円盤充填法が主体を成し続けており、基本的には畿内と同系譜の中でありながら、畿内ほどスムーズに転換が行われなかった点で、両地域間に差異が存在している。

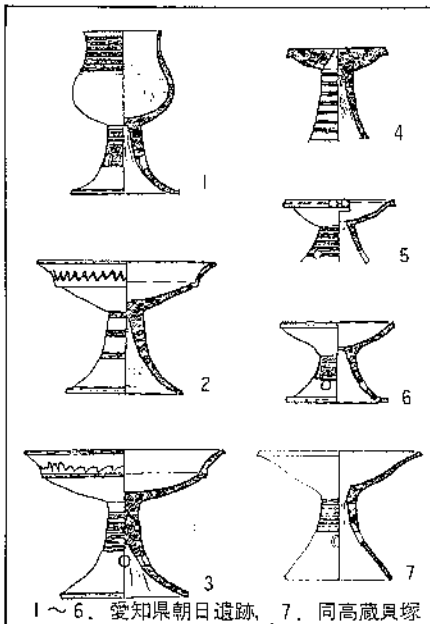
次に東海との比較を行うが⁹⁾、III期からIV期にかけての畿内系への転換がどの様に起こったかを、高坏形土器に見られる東海的要素の表出の実態の中から考えてみたい。まず、II期後半からIII期に相当する山中期の高坏形土器は、形態的にはA2類に近似し、その特徴は櫛描直線文・脚部の櫛描直線文・器壁外面の赤彩である。近江でも口縁部外面・脚部に櫛描波状文・直線文を施すものが存在するが、少量であること、口縁部外面の波状文がヘラミガキであったり、ヘラミガキの施し方の変化によって文様としている等、文様が変異していること、これらの文様と不可分の関係にある赤彩が稀少であること等から、形態的に近似した系譜にある両地域において、文様構成の諸要素が個々に模倣等によって受容・変異して行ったと考えられる。

高坏形土器D類と極めて関連性の強い欠山期の高坏形土器は、東海においても前段階からの移行に断絶があり、また様式として存在する伊勢・美濃～西部遠州地域においても形態差が認められ、単純に比較することはできないようである。まず、形態的にどの地域に対比し得るかを考えてみよう(第5図)。坏部の形態および受部が短くなり坏部が深くなる時間的変化には各地域間の差異は小さく、美濃を中心とする東海西部において口縁部内面に文様帯を持つD3類が多く存在する点に差異が認められる。近江のものも上記の範囲内に収まるが、古式の出土例は少ない。地域差は、脚部と浅い碗形の坏部を持つ小型高坏形土器の在り方に大きく反映されている様である。坏部の深さを1として脚部の長さを見た場合、三河では0.8～1.4、尾張では古いもので1.0～2.0、新しくなると0.7～1.0、伊勢では1.6～2.0となり、伊勢では長脚のものが主体となっている。近江では、若干のばらつきはあるものの0.7～0.8に集中しており、坏部の深さよりも脚部が短いため、長脚の伊勢を除いた他地域のものと比較しても、プロポーション的に頭でっかちで、偏平・短脚であると言えよう。もう一つの特徴である碗形様の坏部に大きくひろがる短脚が付く小型高坏形土器は、西部遠州を除くすべての地域に存在し、小型高坏形土器の主体となっているが、近江においては見られない形態である。

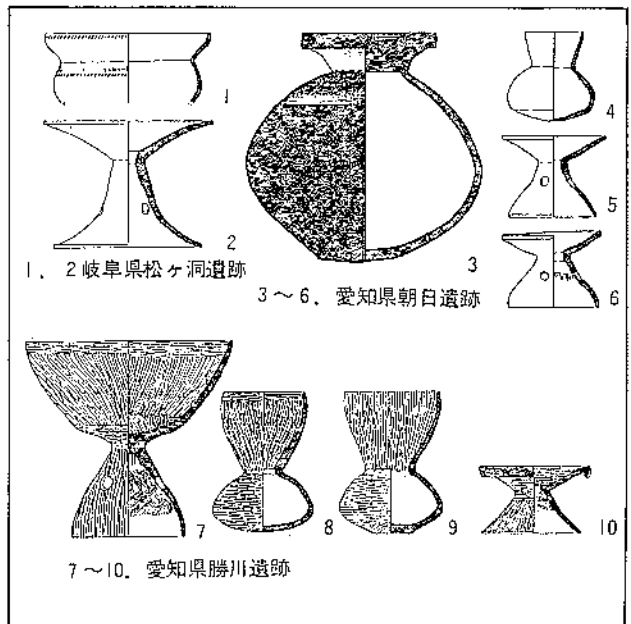
以上高坏形土器D2類を中心に東海地域との対比を行ってきたが、結果的には直接的に対比し得る地域は認められない。三河・尾張を中心とするならば、形態的変異が増幅されていたり、器種の欠如が認められる周辺地域の在り方に共通していると言えよう。様式としての欠山式の範囲に含まれるか否かの検討は後に譲るとして、高坏形土器D2類だけを考えた場合、上記の特徴と共に、明らかに搬入品であるものが稀少であるにもかかわらず当期の近江における(特に近江北半)器種構成の中で高い割合を占めていることは、受容された後極めて短期間に近江的なものと



第5図 各地方出土の高环形土器D1・D2類(欠山期)



第6図 尾張山中期高环形土器器台形土器



第7図 美農・尾張の共伴事例

して変容・定着して行ったと考えられる。これはⅢ期～Ⅳ期に全国的に活発化するより広範囲での頻繁な土器の移動現象による外的要因に基づくと考えられると同時に、Ⅲ期における近江での高坏形土器の停滞にも遠因があると考えられる。

次に器台形土器について検討を加えていくことにしよう。

まず畿内における器台形土器の在り方を見ると、Ⅰ期～Ⅱ期においては筒状のA類を基本とし、B類・複合形態であるC3類が少量存在している。Ⅲ期にはA類も消失し、北鳥池下層式併行期には器台形土器を出土する遺跡は限られ、しかもその量は少なく従属的な器種として存在するようである。ただし、山城を主として受口状口縁甕形土器・同鉢形土器・手焙形土器等を出土し、近江に近似した土器様相を呈する遺跡においては、C類を含んでおり、興味深い現象である。Ⅳ期～Ⅴ期においては小型器台形土器の出現と定型化の過程が見られるが、先述の様にⅢ期以前との間に断絶がある。ここで近江と畿内の共通点を挙げるとすれば、Ⅰ期～Ⅲ期のA類の存在と、Ⅴ期の定型化した小型器台形土器のみと言っても過言ではない。相違点としては、共通点の中でA類の存在を挙げたが、近江ではⅡ期以降系譜の異なるB・C類が主体となりA類はあくまでも従属的であることがまず挙げられる。また、Ⅱ期後半～Ⅲ期に細分化が進み器台形土器が極めて発達することも大きな違いである。そして、近江においてはC類の系譜の中で小型器台形土器への推移を捉えることが可能である点である。

以上の様に畿内とはかなり内容が異なっているが、東海とはどうであろうか。以下に見て行きたい。東海において器台形土器が器種構成の中で主体的に存在するようになるのは山中期以降形態的には当期の高坏形土器から口縁部を除去したものに酷似しており、その点でもC2類に対応し得るものである。ただし、脚部に高坏形土器と同様の櫛描直線文等の文様が施されている点が異なっている(第6図)。続く欠山期のもは、高坏形土器同様各地域で在り方が異なっている。西部遠州・三河は、器台形土器を欠如する地域となっている。尾張では、装飾性が減少したあるいは無文のC1・2類を、美濃ではA類を主体として、伊勢ではA・B類を各々基本器種として具えている⁷⁾。したがって、対象地域としてはC1・2類を器台形土器基本器種として具えている尾張およびA類を主体としながらもC類が確実に存在する美濃に限定して良からう。

地域を上記の2地域に限定した上でもう少し検討を加えてみる。近江においてⅡ期に出現するC2類と山中期に出現するC2類とは、装飾の多少は別として、各々の地域における高坏形土器A2類と親縁関係を持ち、かつ出現当初から各形態内においてかなり強い斉一性を有している点で共通している。一方では、その系譜に関しては、近江ではA類とC類との中間的形態を呈するB類からの分化形態として扱っているが、尾張周辺では先述の様に山中期においていきなりC2類の出現を持って器台形土器の基本器種化が起こっており、この初現期の在り方の違いは極めて大きいと言える。

また、美濃・尾張では、器台形土器C1・2類が受口状口縁甕形土器・鉢形土器の影響を受けた、あるいは模倣したと考えられる鉢形土器をセットとなる器種の一つとしている(第7図)。このことから、この鉢形土器が当期の近江における受口状口縁甕形土器・鉢形土器の影響下に成立したと考えられるものであり、それと対応する器台形土器C類がセットとして美濃・尾張に受容・

定着したと考えることは可能であろう。器台形土器に関係する器種については後に再び触れることとする。続く欠山期でも、このセット構成を存続させた美濃・尾張における器台形土器は極めて近江と近似した様相を示しているが、近江ほどの細分化を認め得ない状況は、逆に近江が器台形土器C類およびその分化形態であるD類の中心的地域であることを裏付けるものであると言えるよう。

4. 関連器種との接点

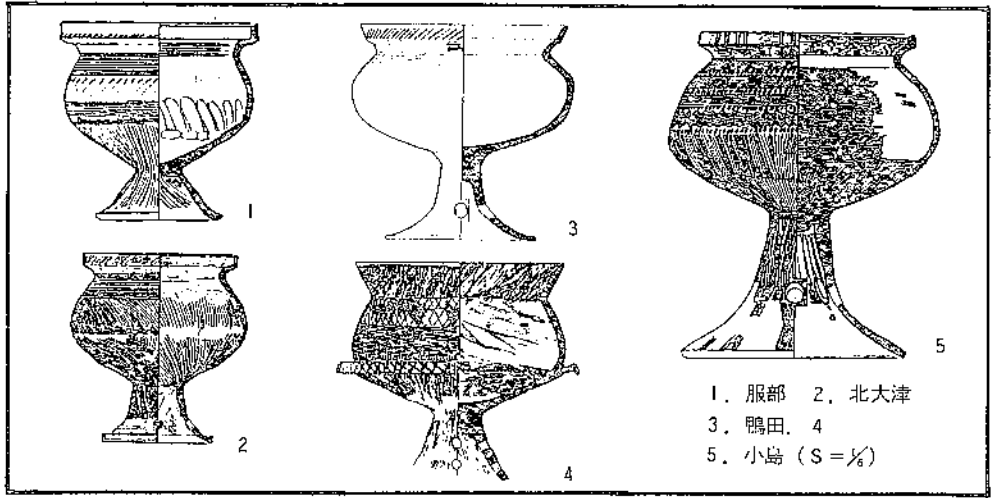
ところで、器台形土器は受け台であるから、これに載せられる・載るべき器種が存在することは言うまでもない。ここではその様な器台形土器と関連性のある器種について若干の検討を加え、別の角度から器台形土器の在り方を見ることとする。

最初に、先に美濃・尾張では器台形土器C類と受口状口縁鉢形土器がセットとして存在し、これが近江での在り方に近似していると述べたが、この点について検証を加えておきたい。まず、受口状口縁鉢形土器自体がどのような器種であるかを見た後に、器台形土器との関り方について見ることとする。

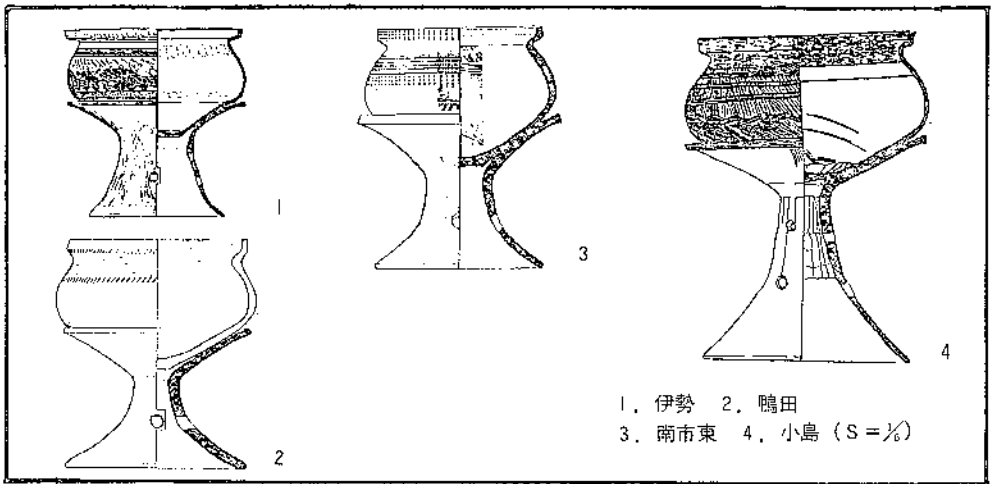
受口状口縁鉢形土器は、受口状口縁の名が示すように、口縁部形態および成形手法・文様構成および施文手法が受口状口縁甕形土器と共通するものである。体部は単純に大きく八の字状にひろがる道有の鉢形土器とは異なり、大きく張り出し、まさに受口状口縁甕形土器を押し潰して扁平にした形態である。したがって甕形土器と鉢形土器と言うよりは、通常のくの字状口縁甕形土器に対するやや扁平な小型のくの字状口縁甕形土器の関係に近いと言える。故に、鉢形土器と呼称するよりも扁平甕形土器あるいは鍋形土器等と呼称した方が適切かも知れない。実際、受口状口縁鉢形土器の外面にススが付着している例は珍しいことではなく、甕形土器と同様に煮沸形態としても用いられていたことは明白である。いずれにしても、本文では従来通り受口状口縁鉢形土器の呼称を使用する。また、この受口状口縁鉢形土器の上部に覆いを付加すると、Ⅲ期～Ⅳ期に分布する手培形土器の典型的な形態の一つとなり、その系譜等を考える上で、受口状口縁鉢形土器の持つ意義は大きい。

さて鉢形土器は、弥生時代前期以来存在する器種であり、甕形土器と相通ずる形態を持つものも見られ受口状口縁鉢形土器その系譜の中に位置付けることができるが、Ⅰ・Ⅱ期前半には、短い脚部を有する台付鉢形土器として存在するようである。Ⅱ期後半以降には脚台を伴うものは稀少となるが、出土量は急増し基本器種となっている。脚台の無くなった受口状口縁鉢形土器が盛行する時期は、器台形土器C類が出現・盛行する時期は、器台形土器C類が出現・盛行する時期と一致している。

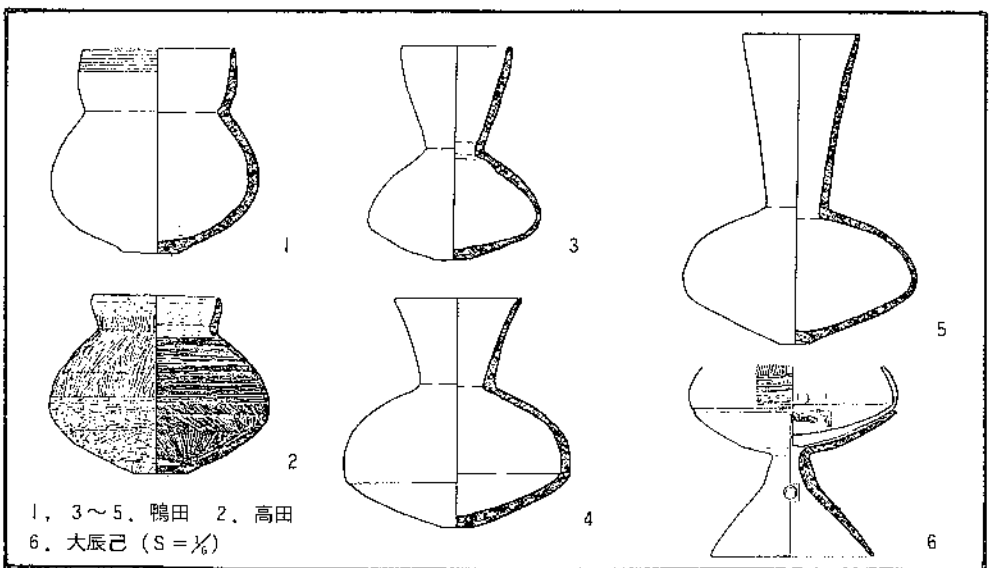
受口状口縁鉢形土器の底部は上げ底気味の小さなものであり、自立し得るものの極めて不安定な状態であり、何らかの受け台を用いる必然性は高いと言える。また、体部下半が直線的あるいは内彎して底部から大きくひろがる形態は、器台形土器B・C類の受部形態と近似している。このことにより両器種を組み合わせた場合、無理なくかつ安定性の高い状態が得られる。盛行期を同じくするこの2器種間に見られる形態の関連性は、各々が対となる器種の接触部位を意識して



第8図 台付鉢形土器



第9図 台載狀況



第10図 短頸・細頸壺形土器諸形態

製作されたことを示すものであり、この2器種が基本的に組み合わされることを前提としていること、つまりセット関係にある蓋然性が高いと言えよう。このことは、受口状口縁鉢形土器の体部下半と丸みを持つ上半との境にある胴部最大径が器台形土器B・C類の受部径とほぼ同じであること、器台形土器に載せた場合受部より上位に出る部分、つまり見える部分にのみ文様が施されること、受口状口縁鉢形土器と器台形土器C2類との複合形態を摸したと考えられる台付きのものが存在することからも傍証されよう（第9図）。

さて、器台形土器に載り得る器種としてもう一つ壺形土器が考えられるが、壺形土器と言っても極めて範囲が広いため、ここでは受け台を要する必然性が低い貯蔵用の大型品は除き、供されるものの中で短頸壺形土器・細頸壺形土器について考えることとする（第10図）。この2器種は、いずれもIII期～IV期に盛行するもので、精良な胎土を用い、外面には丁寧なヘラミガキが施されている。この点で他の壺形土器とは区別し得るし、器台形土器とは共通している。短頸壺形土器は下脹れの体部に直立気味あるいは内彎する口縁部を持つものである。細頸壺形土器は偏平ないわゆる玉葱形と呼ばれる体部に頸部が引き締まった直立気味の口縁部を持つものである。いずれも底部は小さな上げ底か丸底であり、自立は極めて不安定かできない。したがって受口状口縁鉢形土器と同様に受け台が必要となろう。また、細頸壺形土器の中に、受口状口縁鉢形土器と同様に体部下半が直線的あるいは内彎し上半との境に明瞭な屈曲点を形成するものが見られ、器台形土器の受部との関連性が想定される。

ただし、両器種は器台形土器が衰退している畿内においても基本器種として存在している様であり、ただちにこれらが受け台として器台形土器を必要とする器種であると断定することはできない。しかしながら、系譜は異なるであろうが、小型丸底壺形土器が小型器台形土器とセットとして定型化する以前の在り方として、細頸壺形土器・短頸壺形土器が中・小型化した器台形土器とセットとして存在していたと考えることはできないであろうか。今この問題に対する解答を持ち得ない。この点を含めて壺形土器に関する問題は今後の課題として行きたい。

5. 高坏形土器・器台形土器における近江的要素

以上の様に極めて煩雑に近江の高坏形土器と器台形土器について見てきたので、ここでそれらの近江的要素を整理し、まとめとしたい。

まず高坏形土器は、基本的に畿内と系譜を同じくしているが、III期における形態的な停滞と、IV期におけるD2類への転換が特徴として挙げられる。IV期における別系譜への急激な転換は、単に隣接する東海からの外的要因に基づくと言うだけではなく、それらを在地のものとして容納していったことにむしろ注目したい。高坏形土器においては形態的に近江的な要素を抽出することは困難であるが、III期～IV期の「在り方」に近江的な要素としての評価を与えたい。

器台形土器は、第1点としてII期以降のB・C類の盛行が挙げられる。佐原氏が近江独特の器形と指摘した形態であるC2類は、「一東海にもただちに比較しうるものが見られない」とした点では、逆に美濃・尾張とかなり共通性が高いことを示すこととなったが先述の様にやはり近江が中心ではないかと考えている。第2点として、B・C類が同時期に盛行する受口状口縁鉢形土

器と極めて関連性が高いことが挙げられる。近江以外での近江型受口状口縁系土器の出土例を見ると、受口状口縁鉢形土器がかなり存在しており、同時にC類系の器台形土器が認められることが多い。このことは、これら2器種が他地域にもたらされる場合もセットとして取り扱われた可能性が高い。逆に言えば、その組合せが近江的であるということである。第3点としては、装飾性に富むD類の存在である。これは形態的に畿内・東海に直接対比し得るものは認められないものである。そして第4点として、C2・3-F1・2類の移行、つまり弥生時代後期の器台形土器から定型化した小型器台形土器への移行が、一つの系譜の中における小型化によって追うことができる点が挙げられる。

以上の高坏形土器と器台形土器における各要素は、今後むしろ近江内での地域差を示す要素となる可能性を包括している。また、当初に述べた様にこれらはあくまでも「近江的」土器様相を構成する要素に過ぎないことは言うまでもない。したがって、標題のことについては継続して検討を加えて行きたい。また、東西文化を代表する畿内と東海に接した近江において両地域の影響を受けることは、その地理的条件から当然であるが、その外的要因が近江内でどの様に受容・変容し、土器群の中でどの様な在り方を示しているかが、形態的なものとは別の近江の特徴を表し得ると考えている。またその中に、各時代において影響を与えた周辺地域とは全く異なる近江独自の器種を生み得てきた文化的・社会的基盤を了かにする手懸かりがあると考えられる。

6. おわりに

最後に、本文はほとんどが報告書を基としているため実態を言い尽くしているとは言えないが、これはすべて筆者の勉強不足によるものであり、機会があれば訂正・補充したいと思う。また、執筆の機会を与えていただいたことに感謝します。

補記

本文は、昭和58年度岡山大学文学部史学科卒業論文を基に、その中で不明瞭に終わった部分に関して今回再び検討を加えたものである。当時共に弥生時代の地域色を取り上げ、多くの助言を得た故池橋幹君に本文を捧げ、御冥福を祈ります。

注

- (1) 佐原 真 「第1章 先史時代」(『彦根市史』第2編上代 1968年)
佐原 真 「琵琶湖地方」(『弥生式土器集成』本編2 1968年)
- (2) 当該期の編年を試みている文献としては以下のものがある。
 - 1) 中谷雅治他 「鴨田遺跡」(『国道8号線バイパス関係遺跡調査報告書11』滋賀県教育委員会 1973年)
 - 2) 別所健二他 『久野部遺跡発掘調査報告書—七ノ坪地区—』(滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会・野洲町教育委員会 1977年)
 - 3) 兼康保明他 『久野部遺跡発掘調査報告書—野洲郡野洲町字十ヶ坪所在—』(野洲町教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1977年)
 - 4) 用田政晴 『県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書II・3—長浜市大辰己遺跡—』(滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1985年)
 - 5) 中西常雄 『北大津の変貌—弥生時代から古墳時代へ—』(1979年)
 - 6) 中西常雄 「近江における甕形土器の動向—庄内期を中心として—」(『考古学研究』第32巻第1号 1985年)
 - 7) 丸山竜平 「弥生時代から古墳時代へ—近江における最古の土師器を求めて—」(『古代研究』12 1977年)
 - 8) 丸山竜平 「弥生式土器の終焉」(『古代研究』10 1977年)
しかしながら、未だ確立したものはないため、本文ではこれまでの成果および各報告書を基に、主として畿内系器種・形態のもの対比および私見による土器構成により時期決定を行った。尚、畿内における型式名を用いているが、あくまでも時間的に併行することを表しているだけであり、型式内容の同一性を表すものではない。また、弥生時代と古墳時代の画期については、社会的においては近藤義郎氏の考えを基本とする。土器様相については、近江における土器変遷を通観した場合、IV期では受口状口縁甕形土器・鉢形土器を主とする在在地性・弥生的要素の残存と近江内における南北差が存在しているが、V期になると新たに定型化した器種・形態による斉一化・画一化が起こる。筆者はこれに注目し、先述の社会的画期と合わせ、IV期とV期の間を時代の画期として評価する立場をとる。
- (3) III期後半～IV期：欠山式と考えており(注6参照)、古式の欠山式類似のD1類はIII期に所属するようであるが、極めて稀少であり、近江において主体的形態であるD2類はほぼIV期に限定して良いと考える。
- (4) 合田茂伸 「北鳥池下層式併行土器群の問題」(『関西大学考古学研究紀要』5 関西大学文学部考古学研究室 1987年)
- (5) 寺沢 薫 「奈良市六条山遺跡」(『奈良県文化財調査報告書』第34集 奈良県立橿原考古学研究所編 1980年)
寺沢氏は、弥生時代後期末にその祖形を求めているが、その他では不確定要素が多い。
- (6) 東海(尾張)との対比は下表の通りである。

近 江	尾 張
I 期	+
II 期	山 中 期
III 期	
IV 期	欠 山 期
V 期	元屋敷期

(7) 鈴木敏則 「欠山式の地域性」(『転機』創刊号 1985年)

愛知考古学談話会 第3回東海埋蔵文化財研究会「欠山式土器とその前後」(1986年)

編集後記

年度当初に、これまであまり活発でなかった文化財愛護のための普及啓発事業について、今年度からはより充実したものを計画せよと命ぜられた折り、各種の展示会などの一般向けの事業のほかに、専門知識の普及啓発を兼ねて財団職員の普段の研修の成果を公表できるよう『紀要』の発刊を試みることにした。10名程度の論考を掲載することとしたが、実のところ、あまり原稿が集まらないのではないかと不安であった。しかし、これは取り越し苦労で、希望者を募ったところ即座に10名の申し出があり、職員の隠れた研究意欲を垣間見た次第であった。本年は創刊の年でありますが、初心を忘れることなく続けたいものと思う。

(普及啓発事業担当)

昭和63年3月 初版
平成4年3月 2刷
平成6年3月 3刷

紀 要 第 1 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(0775)48-9780・9781
印 刷 宮川印刷株式会社
大津市富士見台3番18号
Tel(0775)33-1241